

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 78 号

2011年9月



仙水沼自然観察会に参加して 柳田 美津子

3年前に吾妻山に魅せられてあらゆるルートから無我夢中で登り、5万分の1の地図の中に小さな沼を見つけました。それが“センスイヌマ”でした。どんな沼なのだろう。響きのよいネーミングに興味をそそられました。旧吾妻開発パイロットから登山道に繋がる短縮ルートがあると聞き、友達に同行をお願いし下見に出かけました。しかし、幹線道を間違えて枝の突き出た道を右往左往し、とうとう辿り着きませんでした。その後機会もなく半ば諦めておりましたから、今回の観察会はとても楽しみでした。

観察会当日の朝、2台の車に分乗させていただき四季の里より運動公園をぬけ吾妻温泉に向かいました。先の吾妻開発パイロット幹線6号を入り10分もすると、廃墟となった立派な作業施設前に到着です。この道は、今や溪流釣りや沢登りの人たちの行き交う荒涼した道と聞いておりましたが、意外とすんなり通行することができ驚きました。車を降りしばらく歩くと、荒れた大きな貯水池に出ました。わずかに耕された畑も見受けられましたが、バブル期の大規模な県の酪農業開発の成りの果てにさびしく感じられました。森の奥の緑濃い吾妻の山頂がやけに眩しくて美しく対照的でした。

そこから塩の川沿いの登山道に出るまでは、深い藪でした。代表の守さんをはじめ、下見をして下さった方のおかげで赤布をたどり、簡単に登山道に出ることができました。登山道にさえ出ればルートもしっかりしていて迷うこともなさそうです。

しばらく登山道は笹とミズナラの大木が森を深く蔽い、オヤリハグマ、オクモミジハグマがあちらこちらに群生しておりました。花が咲く頃は森が白く染まるのでしょうか。ヤマブキシショウマ、トリアシショウマ。イチヤクソウやウメガサソウも咲いていて心癒されました。山地の湿った岩などに生えるというフクロシダも教えていただき、ルーペで覗くと包膜が確認できました。少しずつ高度を上げるとコメツガの良い香りが漂い、吾妻らしくなってきました。花の時期は終わっていましたが、ミツバオウレン、イワカガミ、ショウジョウバカマもありました。

急坂を越え、やがてヒメコマツとハクサンシャクナゲが出てくると、木々の隙間から仙水沼が見えてきました。広場にリュックを置き、絶景地やらの案内されて笹を漕いで行くと、目の前には湿原が現れました。あの地図上の小さな沼はなんと湿原のある神秘的な沼だったのです。ミズゴケを踏まぬようそっと下り立つと、ミツガシワの若い芽が生き生きとして群生していました。成長していつか花を咲かせたら、もっと素敵な湿原になるでしょう。また見てみたいと思いました。ワタスゲ、モウセンゴケ、コバトシボソウ、キソチドリ、ツマトリソウ、ネバリノギラン、コバイケイソウ、ヤマドリゼンマイ。周囲にはクロマメノキ、マルバシモツケもありました。素敵な吾妻の秘密の園です。

賑やかに昼食を頂いた後は、真っ白に気品満ちたハクサンシャクナゲの群生地も案内していただいて満足気分で下山いたしました。



ハクサンシャクナゲ



仙水沼

放射能の食物連鎖

鎌田和子

「残念ですが蝶も汚染された植物を食べれば放射能が体内に取り込まれます。ただし、排泄もされます。その蝶の幼虫を鳥が食べれば鳥も汚染されます。放射能の食物連鎖です。これからは生態学的半減期について注意する必要があると思います。」

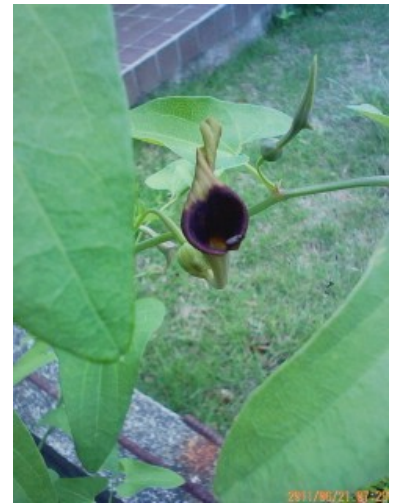
これは、私の疑問に対するS氏の回答です。

昨年の夏遅くに、わが家のウmanosuzukusaに産みつけられたジャコウアゲハの卵が孵化し、そのうちの二匹が蛹化しました。そして越冬。寒風や雪に耐え、3月11日の地震や原発事故の影響をちらとも受けずに、5月半ばの陽気のいい日に羽化しました。二頭とも雄でした。その雄蝶たちは、2週間ほど、庭先を飛び回っていました。多分、雌蝶を探し求めていたのでしょう。そんなある日、どこからかジャコウアゲハの雌が庭のウmanosuzukusaにやってきたのです。この植物特有の臭いをかぎつけてきたのでしょうか。その



ジャコウアゲハ

雌蝶はどこで産まれたものやら。食草のウマノスズクサが生えているところだということは分かりますが、ウマノスズクサはどこにでも生えているものではないのです。阿武隈川の伊達橋付近から飛来したのかしら？ 蝶って、そんなに遠くまで飛ぶものなの？ 驚き感心しながら雌蝶の動きをよく見てみると、緩やかに飛び、葉に止まり、ひらひら飛び上がっては、また別の葉に止まる。そんな動きを繰り返しています。写真①は、産卵の瞬間かもしれませんが。葉裏には3個の卵が付いていました。「今夏も、またジャコウアゲハの観察ができる！」と喜ぶ一方で、「蝶たちにとって放射能の影響はどうかしら？ 直ちに影響はない？ それとも小さい生き物だから、直ちに影響を受けるの？」など、次々と疑問がわいてくるのでした。



ウマノスズクサの花

前段のSさんの回答は、そういういきさつがあつてのものです。これから、自分の庭先で、蝶の生育を観察することは、そのまま「放射能の食物連鎖」を観察することになる！？ Sさんが言う「生態学的半減期」なるものが、何のことなのか、私にはよく分かりません。が、一つだけハッキリと分かったことは、私たち人間も、蝶と同じように放射能に汚染された環境の中で生活していかなければならないということです。すでに、「放射能の食物連鎖」は始まっています。

悪夢であつて欲しいようなこの現実とは、決してもとどおりにならない。そのことに対する憤りや、やりきれない感情を、鎮めてくれたのは、ほかでもない、ウマノスズクサの花と葉裏の卵でした。『馬の鈴』のような果実に、いつなるの？ この花には、虫を呼ぶ仕掛けがあるらしいけど、どうなってるの？と、毎日毎日、葉上の花(写真②)を眺めたり、孵化したばかりの幼虫たちが無事に生長しているかを、食痕を頼りに匹数を数えて確かめたり。そんなことに夢中になると、「放射能の食物連鎖」をいつか忘れてしまうのでした。(2011.6.22)

鹿狼山から 18 ～被災地その後～

小幡 仁子

3月11日の東日本大震災の津波で私が住む新地町は甚大な被害を受けました。鹿狼山から眺める新地町はどのようになったかと思い、久しぶりに登ってみました。あんな震災があつても季節は巡り、タマアジサイが花開いていました。イヌブナが珍しく実を付けて、サルトリイバラ・シラキ・キブシ・マタタビなども緑色の実を付け、山は実りの季節に入っていました。



珍しくイヌブナが実を付けた

さて、頂上から見る町はずいぶん変わっていました。防波堤は決壊し、海水が入り込んでそのまま大きな池になっていました。今回の地震で地盤沈下したところに海水が入ったのか、もともと低い土地だったのか、確かあの辺りは駅と海の間で葭(ヨシ)が生える湿地が広がっていた気がしました。釣師浜漁港の跡も分かりました。あの周りに沢山の民宿や人家があつたはずですが、今では何もないのが分かりました。

これからはあの土地はどうなるのでしょうか。海水が入り込んだ所は放って置けばやがては葭で覆われるのかもしれませんが。私は子供の頃の風景を思い出しました。今、発電所のある場所に私の家がありました。「ダイハイスイ(大排水か?)」という川があつて、その川の東側は葭の原がずっと海の方まで広がっていました。川の西側は田んぼが広がっており、そこは湿地を土地改良して田んぼにしたのです。私の記憶の中では、地面を掘り起こ

してそこに木を束にした物を並べて入れていました。父は「暗渠(あんきょ)をする」と言っていました。暗渠は縦横無尽に並んでいましたから、その労働力は大変なものだったと思います。私の祖父は二本松の東和村からこの土地に開拓農民として移り住みました。山間の村では自分の土地を持つことができないので、この地に来たと聞きました。最初は米も碌に取れなかったが、苦勞して土地改良を重ね、米がたくさんとれるようになったということでした。父は裸足で田植えをして、牡蠣貝の殻で足に怪我をし、田植えができなくて困ったことがあったと言っていましたから、元々は海だったのでしょう。



海岸部にできた大きい池

そんな苦勞をして作った田畑も今は発電所の敷地となり、見る影はありません。発電所を作るときに発掘調査をしたところ、私の家は、大きな塩溜(しおだめ)の上に建っていたということでした。昔々は、海水を塩溜に入れて水分を蒸発させ、釜で煮て塩を作ったそうです。やがて塩を工場で作るようになり、塩溜は不要になって埋め立てられたのでしょう。敷地の中には大きな塩業会社跡地もありました。戦時中に爆撃を受けて、廃墟となって残っていました。朝鮮人労働者が沢山働かされていたそうです。また、海岸も子供の頃は砂浜が延々と広がっていて、海に入るまでに「あちち(熱い)」と言って入った覚えがあります。ハマヒルガオの咲く美しい海岸でした。それも相馬港ができてから潮の流れが変わり、砂浜はなくなって、消波ブロックの並ぶ防波堤となりました。

人は自然をどんどん変えて行き、便利で豊かな暮らしを手に入れました。しかし、今回の津波で、海岸の建造物は跡形もなく壊れ、流されてしまいました。また、大切な家族や友人をも失ってしまいました。私たちは、本当は家を建ててはいけないうちに家を建て、開発すべきでない所を開発してきたのかも知れません。知人は、自分の家の字名は「原」であるが隣接地は「木船」で、昔は浦のような所だったのかも知れない、と言っていました。そこは6号線の西ではありますが、津波が到達しています。自然は、元ある形に戻ろうとしている、そのように思えてなりません。人間は無理を続けてきたのではないのでしょうか。これからどうしていけばいいのか、以前と同じように作り直すのがいいのかを、考えなくてはなりません。

新地町では今年のお盆はたくさんのお家で新盆を迎えました。私の次男は仙台で学生生活を謳歌し、音沙汰がありませんでしたが、ひょっこり帰ってきました。8月13日の夕方に実家の父母と一緒に墓参りに行きました。お墓は震災で倒れはしましたが、津波は免れたので直すことができました。父が次男に「じいちゃんが骨になったら、この石を動かして土の所に空けてくれ」と言うのに、「石、重いだろ」と答えていました。その後、母の実家のお墓にも寄りました。次男が行きたいと言ったのです。いここはこの津波で一人息子を亡くしました。次男の同級生でした。次男は「じいちゃん、どうやって線香に火をつけんの?」と言って、やってもらっていました。墓誌銘には新しく名前が彫られ、19歳とありました。次男は、いつもは形だけ頭を下げて終わりなのに、真面目な顔をして手を合わせていました。それを見て、胸が熱くなりました。私は大切な息子を失わずに済んだ、この子には熱い血が流れ、息をして私の側にいてくれる。それが希有なことのように、有り難く思われました。母も「泣いて泣いて、諦める他なかったなあ」と、溜息をつきました。そして、お墓に向かって「会いに来たがんねえ」と話しかけていました。

あれから5ヶ月が過ぎ、お盆がきてお墓に手を合わせ、私も次男もやっと心の整理が付いた気がします。(2011年8月31日)

「大震災が教えてくれたものII」 ～阿武隈の登れない山～

かつて宮沢賢治は福島駅に降り立ってこんな暗示的な詩を残していた。

あれが巨大な阿武隈の
片麻岩系の山塊であるが
そのいちばんの南のはじから
巨きなひかる雲の塊ものぼる（以下略）

造園家とその助手との対話

賢治が詩の中で予見したように福島市の「南のはじから巨きなひかる雲の塊」が押し寄せて来た。美しい自然に囲まれた町を放射能という目に見えない魔物が襲ったのは、3月15日深夜のことだった。ブルームと呼ばれる雲に乗って北上、飯舘村、浪江町、伊達市、福島市などの町に雨やミズレに混じって降下した。

福島原発の半径20km圏を警戒区域とされ、立入禁止措置がとられ、人は全員避難させられている。30km圏も緊急時避難準備区域とされ、住んでいる人は少ない。さらには計画的避難区域と呼ばれる放射線量の高い30km圏外にも、人影を見ることは少ない。これら政府の指定した「区域」には阿武隈の多くの山が含まれている。登山道の整備された山の名前を挙げると、28座にも及ぶ。

- ・半径20km圏内 警戒区域(立入禁止)＝八丈石山、懸ノ森、手倉山、十万山、戸神山、日隠山、大倉山、郭公山
- ・半径30km圏内 緊急時避難準備区域＝五社山(広野)、三ッ森山、屹兎屋山、猫啼山、鬼ヶ城山、大滝根山、五社山(川内)、鎌倉岳、五十人山、国見山、中ノ森山、五台山、小太夫山
- ・計画的避難区域＝野手上山、花塚山、高太石山、霊山、虎捕山、雨乞山、御幸山

いずれもしばらくは、登ることは出来なくなってしまう山々である。特に20km圏内は、セシウム137の半減期間は入山出来ないと道は無くなるかも知れない。こんな形で入山禁止や廃道になった経験は今までにない。

震災前の12月に福島第一原発から12^{km}の距離にある日隠山を歩いた。標高わずか600mの低い山だ。この季節、まだ晩秋の装いを残している。登山道は落葉で埋もれ、木漏れ日が影をつくっていた。展望台や山頂からは今ではすっかり有名になってしまった福島第一原発が四基並んでいる姿が眺められた。そんな四ヶ月後の悪夢を誰も知らない。その向こうに太平洋が大空の雲を誘うように広がっていた。クヌギの古木が踊り白ブナと呼ばれるイヌブナが輝いていた。

あれから四ヶ月、この山には目に見えない放射能セシウムが、大量に降り注いでいることだろう。政府が決めた警戒区域の中に入れられ人間の一切の立入が禁止された場所になってしまったのだ。一見、何も変わっていない風景に、怒りと悲しみを覚える。

私のような老人は、放射線リスクを云々する意味がないが、子供など若い方の将来がとても心配だ。既に汚染された土地は、そう簡単に元には戻らない。福島の子供達は校庭や公園で遊ばなくなった。もちろん山に至っては、その姿を見ない。高濃度に汚染された20km圏内に住んでいた人々を戻そうと政府は考えているようだ。例えば家屋や田畑を除染したとしても、西側に広がる阿武隈山地の森や堆積した落葉を除染することは不可能だ。そこから流れ出る水は汚染され、風が吹くたびに街にセシウムが降り注ぐだろう。いつの日か阿武隈の山に子供も含めて人々が姿を見せる日を願ってやまない。



日隠山から福島第一原発(上)

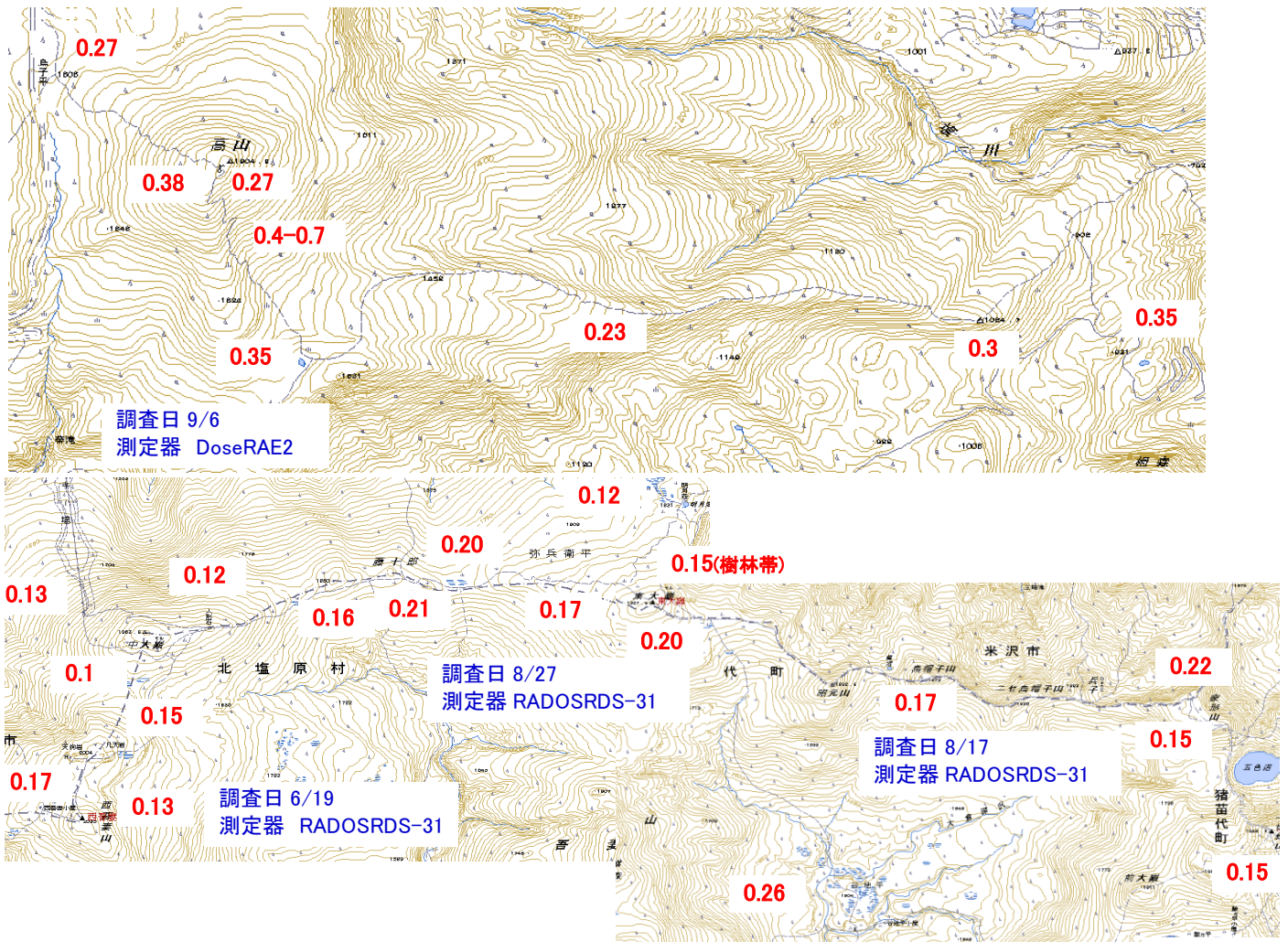
日隠山で踊るクヌギの大木(中央)

日隠山の大ブナの根(下)

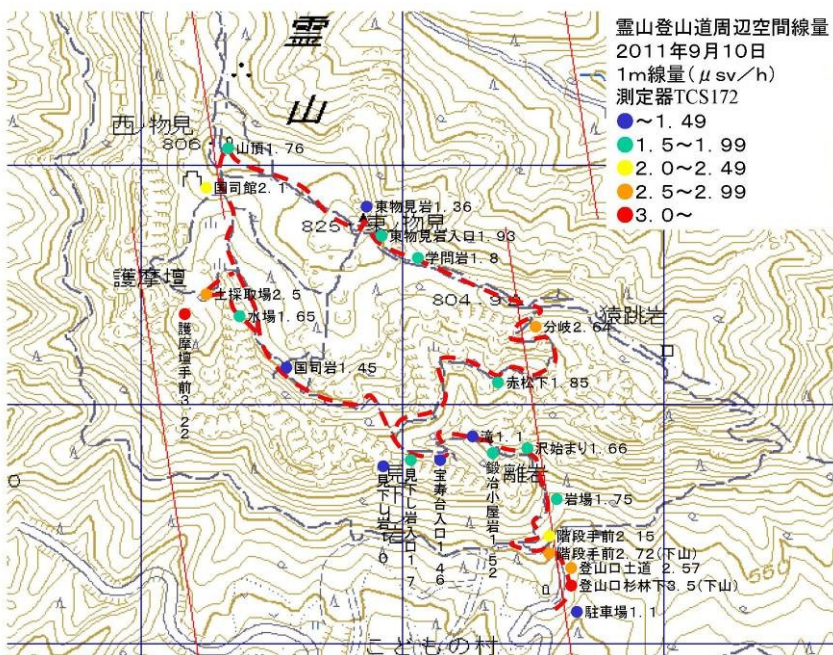
山岳の空間線量マップ

これまでに吾妻・安達太良・磐梯山・飯豊連峰等の山岳の放射線量を測定しております。今回は高山と吾妻連峰縦走路および霊山の放射線量マップを紹介します。

高山と吾妻連峰縦走路の空間線量マップ（測定高さ1m 単位は $\mu\text{Sv/h}$ ）



霊山の空間線量マップ



9月10日(日)に学習院大学・村松教授による霊山登山道および周辺樹林帯の放射能汚染実態調査に奥田・佐藤が同行しました。

麓の居住地より高い放射線量が測定された地点もありました。

広葉樹林では落葉層で高い放射線量が測定されました。針葉樹の林床では登山道より低い放射線量が測定されました。

これはフォールアウト時に葉を着けていた針葉樹が放射性物質を捕捉し傘の役割をしたためです。

しかし、針葉樹林の林床は幹還流水や葉からの雨滴等により翌年の方が放射線量が高くなる場合もあるので針葉樹林帯では来年も注意が必要です。

ハクウンボク (*Styrax obassia* エゴノキ科エゴノキ属)

ブナとミズナラの混交林の沢沿いなどやや湿った平地や凹地に植生する落葉広葉樹。仲間のエゴノキは比較的乾いた傾斜地や林縁に植生し、住み分けている。

ハクウンボクの葉はその年に伸びた枝に3枚から5枚付くことが多い。葉は、互生であるが、本年枝の基部に付く葉は2枚が対生のように向かい合って付いていることが多い。このため、3枚がワンセットの三出複葉のように見える枝が散見される。葉形は円形で上部には粗い鋸歯がある。葉の裏面には星状毛が密生して緑白色であり、脈が目立つ。

花は頂性で総状花序。葉が展開し、十分成長した後に、先端に大柄の花序を伸ばして多数の白い合弁花を咲かせる。花冠は5裂する。満開時のハクウンボクは白花のツリーで樹全体が装飾され、実ににぎわしい。

ハクウンボクの冬芽は、葉柄の中に納まっており、葉のある間は冬芽が見えず、落葉して初めて芽が見える。これを、葉柄内芽と言う。葉の落ちた跡(葉痕)は、O型あるいはU型になる。葉柄内芽の樹には、ハクウンボクの他にウリノキ、キハダ、ヌルデなどがある。冬芽はムシカリやムラサキシキブと同じく裸芽で、縦に並ぶ副芽がある。新しい枝は緑色であるが、2年目には樹皮が縦に短冊状に剥がれ、紫褐色となる。

ハクウンボクの花には阿武隈山系の日山で初めて出会った。その時は風が強く写真撮影を断念した。今から15年以上も前になる。その後、高山山麓でも度々ハクウンボクを確認することができたが、花を咲かせた個体に遭遇する機会に恵まれず、なかば諦めていた。期せずして開花盛りのハクウンボクの群生地を訪れることができた。年に1度あるかないかの幸運であった。ハクウンボクは環境を整えばまとまって植生することを知った。



アケボノソウ (*Swertia bimaculata* リンドウ科センブリ属)

ミズナラ林の湿地周辺や湿り気のある林縁に植生する2年生の湿性植物。1年目は根生葉がロゼットを形成する。2年目に葉茎を伸長し、散形花序を形成する。

葉は対生する。葉形は楕円形で先端部は尖る。根生葉は長い葉柄があるが茎に着生する葉はほとんどない。葉縁は鋸歯がなく滑らか。基部から3葉脈が葉身を走る。茎は四角形である。

花は頂腋性。伸びきった草姿の先端部に幾何学的に分岐した長い花柄の先に白い合弁花を1個着生する。花冠は深く4または5裂する。雄しべは5本で、雌しべの基部付け根から裂片の間に花糸を伸ばし、裂片を裂くように紫がかった葯を覗かせて開花する。雌しべの柱頭は透明感のある白で2裂する。裂片の中央部よりやや上のところに2個の黄緑色の蜜腺があり、そこから先端部には濃紺紫色の斑点が多数、散らばる。学名の種小名は2個の斑点があることを示したもの。花が咲く前の蕾(花冠の外側)は淡緑色の縦縞模様が入りホオゾキの様。

アケボノソウの名は蜜腺を月、斑点を星に見立てて夜明けの曙の時刻の空になぞらえたものと言う。命名者の感性に脱帽の思いである。そこからつけられた花言葉は「今日も元気で」となると見ごとの一言。「初恋」と言うのもあるらしいが、こちらは初めてこの花に出会った時の気持ちの高ぶりをうまく表現しているように感じる。

アケボノソウには中吾妻山麓の凹地で初めて出会った。その個性的な花模様に、自然界では計り知れない美しさがさりげないところにちりばめられているものだと実感した。それから、花探しの熱が更に上がる中で、秋口になるとアケボノソウの花の記憶が脳裏をよぎることがあったのだが、多くの魅力的な花々との逢瀬で、忘れかけていた。そんな頃に通りがかった山道を満開のアケボノソウの群落が塞いでいて、ああそうだったと再びあの高まりを思い出した。どこか懐かしい記憶に辿り着いた時の安らぎを感じさせる……そんな花のように思う。



第118回自然観察会案内：龍ヶ岳自然林と鳩峰峠の植林地観察会

日時：2011年10月2日（日）7:00～15:00

集合場所 果樹研究所

集合時間 7:00 参加定員 20名

内容 鳩峰峠龍ヶ岳のブナ林の紅葉を観察します。散策後は恒例の芋煮会です。その後、植林後の樹木の成長の様子を確認します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、あれば図鑑、

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：10月1日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。*メール申込みの際には、全員返信モードでお願いします。

西吾妻登山道保全ボランティア

日時：2010年10月22日（土）6:30～16:30〔予備日：10月23日（日）〕

内容：6月に設置した誘導ロープの取り外し作業をします。天元台から入山しA班とB班に分かれて作業をします。A班はかもしか展望台から西吾妻小屋まで、B（健脚組）は西吾妻小屋から西大巓までとします。

集合場所・時間：果樹研究所 6:30 参加定員 10名程度（限られた時間内での作業となりますので体力的に自己管理のできる方の参加とさせていただきます）

申し込み：10月15日（土）まで佐藤守へ電話またはメールにてお願いします。

第119回自然観察会案内：阿武隈峡遊歩道（蓬莱岩）の河辺林観察会と総会

日時：2011年11月23日（水）8:00～16:30

集合場所：福島市立子山自然の家駐車場 集合時間8:00 参加定員 30名（総会は定員無し）
（道路不案内の方、交通手段の無い方は申込時にお知らせください）

総会会場：福島市立子山自然の家（960-1321 福島市立子山字金井作1 024-597-2951）

内容：午前中は阿武隈峡の河辺林を散策します。午後は立子山自然の家で総会です。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費：保険代（300円） 申し込み：11月22日（土）まで

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

山形県自然保護団体協議会一般公開講演・シンポジウム

「東日本大震災後の日本の自然保護を考える」

- ◆ 期日 10月8日（土）13:00～14:30
- ◆ 会場 川西町農村改善センター
- ◆ 参加費 500円（高山会員は原則無料）
- ◆ 講演：「記者の目から見た東日本大震災」「原発震災を超えて」
- ◆ シンポジウム：「東日本大震災後の自然保護-私達は何をすべきか」

参加希望者は佐藤守までご連絡ください。車に乗り合せて行きます。

『船形山のブナを守る会』より「船形山ブナ通信 2011年9月14日号」が届いております。閲覧を希望する方は、メールにてお送りしますので佐藤または奥田まで御連絡ください。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第78号 2011年9月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木